

ダンジョン *The Dungeon Seeker* シーカー

5

サカモト666
SAKAMOTO666



ヘルメス＝マッキンリー

Sランク級のトレジャーハンター。
「狭間の迷宮」でなずなど出会う。



坂口なずな

亜美の妹。
「狭間の迷宮」深層域を
攻略している一人。



シャルナート

赤髪の美少女。
その正体は炎龍皇と
地龍皇が同化した龍種。



さかぐち あみ
坂口亜美

Bランク級冒険者選抜試験で
順平と共闘した日本人。
職業は盗賊。



たつみや のりこ
竜宮紀子

木戸と共に順平を
「狭間の迷宮」へ
放り込んだ
裏切り者の一人。



きどしょうた
木戸翔太

順平を「狭間の迷宮」に
突き落とした不良グループの
リーダー。



たけだ じゅんぺい
武田順平 ([擬態]使用Ver.)

目立たないよう
スキル【擬態】で変装した順平。
金髪蒼眼の駆け出し冒険者風。



たけだ じゅんぺい
武田順平

異世界に飛ばされた青年。
「狭間の迷宮」から一時離脱し、
外の世界でステータス上げに励む。

プロローグ 頂上決戦 ▼▼▼▼▼

夕暮れの岩肌の荒野。

半径数百メートルの大きなクレーターがそこにはあった。

そのクレーターを中心として、概ね半径四十キロメートル以内には草一本もなく、延々と地肌が露出している。

——ここはかつて、炎と地の龍が争った場所。

炎の龍は原子単位での物理法則を捻じ曲げ、局所的に核攻撃を行った。
対する地の龍は魔術の極限結界の技をもって自らと、そして大地への被害を最小限に抑えながら



火の龍を迎え撃った。

物理の極限と魔術の極限による戦闘の結果、生物の存在し得ない荒野の光景が作られた。

そして今――

そのクレーターの中心部で、一糸まとわぬ姿の赤髪の少女と、黒髪をなびかせたセーラー服姿の少女が向かい合っている。

赤髪の少女の見た目は十代前半、セーラー服の少女は十代半ばから後半といったところだ。

赤髪の少女は、この世のものとは思えぬ芸術品のような美しい容姿の持ち主。

対する黒髪の少女は、間違いなく整った顔立ちではあるが、同年代の女性が百人もいれば一人か二人はいるといった程度の美形で、常識外れという訳ではない。

「炎龍皇……早く一つになったほうがいい。単独ではボクの相手にはならないよ」

そう言うとセーラー服の少女は、赤髪の少女の後ろに控える金色のドラゴンを指さした。

「相手にならない？ 確かにそれはそうかもしれない……けれど貴方の真意は別にあるはずだ」

「真意というと？」

「正確に言えば、私達一人一人では貴方の経験値にならないという事だろうか？」

セーラー服の少女は目を細めて頷いた。

「理解が早くて助かるよ。十秒だけ時間をあげるから早く一つになったほうがいい」

「言われなくてもそうする。悔しいけれど私達は単独では全盛期の一割の力もない。迷宮最深部を、ある程度の余力を残して攻略できる相手となると……かなり厳しいものがあるからね」

赤髪の少女は、金色のドラゴンに向き直る。

両者が阿吽あうんの呼吸で頷き合うと――周囲が光に包まれた。

互いの体が眩まぼゆい光の粒子となり、やがて両者は空中で溶け合うようにして混じり合っていく。

光が収まった後、金色の瞳、赤色の髪を持つ少女は、不快の色を隠しもせずに口を開いた。

「これでわらわは炎地龍皇となった訳じゃ。で、まったく……失礼な奴じゃのう？ 突然に現れて

開口一番の台詞が『炎と地の龍よ……その首もらい受ける？』じゃと？」

「殺す相手に失礼もクソもないだろう？」

呆れたように笑うセーラー服の少女。

対する炎地龍皇は青筋を浮かべ、今すぐにでもセーラー服の少女の胸倉に掴みかからんばかりの怒気を発する。

「彼の地の迷宮からの迷い人よ。お主のような輩よびなに外を出歩かれては全世界の迷惑じゃっ！ 今いますぐに帰るがいいっ！」

「それは命令？ あるいはお願いなのかな？」

「わらわは龍皇じゃぞ？ 命令に決まっておろう」



はア……とセーラー服の少女は深い溜息をついた。

「炎龍のほうが話を通じやすいんだけどな。まあ、その姿の時は地龍が強くなるみたいだから仕方ないか」

「何を言っておるのじゃ？」

「命令とは強制力がなければ有効に発動しないんだよ？」

「じゃから、わらわは龍皇だと言っておる」

「ボクはキミよりも強いと言っているんだけど？　だから、この場合は命令ではなく、お願いという形にするべきだね」

くふふつと炎地龍皇は笑った。

けれどそのコメカミには、幾筋もの血管が浮かび上がっている。

「この前も迷宮出身の者が歯向かってきおったが……あその者どもは勘違いと身の程知らずが多いようじゃな？　わらわの力がいかほどであるかすらも理解しておらぬ」

「知っているよ？」

「ん？」

「ボクはキミ達の常識外れの強さを十分すぎるほど正確に知っている」

「ふむ？　ただの世間知らずではないとな？　わらわをわらわと知った上で喧嘩を吹っかけている

と？」

「ああ、そりやあもう痛いほどに知っているよ」

「ハッターはいい加減にせい」

そこで炎地龍皇は呆れたように肩を竦めた。

「ハッター？」

「そもそも……正確にわらわ達の力を知る者など存在せぬのじゃ、なんせ、わらわ達と対峙した者で生き残っておるものはおらぬからな。外野のギャラリーがわらわ達の戦闘行為をほんに遠目から観測した程度の伝聞しか残っておらん」

「……」

「故に身の程知らずが突っかかってくる事も、ある意味では致し方ない面はある。まあ、迷惑この上ないがな」

「だからボクは知っていると知っている。キミ達の力も強さもね。出来る事と出来ない事、そして奥の手。手の内の全てをボクは知っている」

くふふ、と炎地龍は鼻で笑った。

「ハッターも大概にせい、小童がっ！　わらわ達の手の内を知っておるのは……炎龍皇と地龍皇のお互いだけじゃ！」



「本当に面倒な人だな……それじゃあ論より証拠を示そう」

「証拠とな？」

「まず、現在のキミの状態だ。二体が一人になる事によって欠損した龍の力を補い合う。結果として……各々の全盛期の百二十パーセント程度の力になる、かな？ まあ、そういった個体として肉体を形成している、つてところかな？」

「……な？」

「炎龍の能力は攻撃特化だね。物理干涉による核攻撃全般が得意技だ。その中でも核融合の更にある技術の使用を得手とする。例えるならば最強の矛だ。まあ深層域では俗に【煉獄の火】と呼ばれる技術で、それほど珍しい能力ではないのだけれど」

ポカンと口を開け、呆けた表情を浮かべる炎地龍皇。

「……え？」

「そして地龍は魔術結界と物理干涉を合わせた防衛を主とする。ただの魔術ではなく更に物理演算法則に介入しているから……普通の空気がオリハルコンの硬度を遥かに超える鉄壁となる。例えるなら最強の盾だね。これも、迷宮深層ではそれほど珍しい能力ではない」

「……なん……じゃと？」

「最強の矛と最強の盾を持った二者が一つとなり、なおかつスキル以前に個体としての力も上がっ

た。これなら勘違いするのも無理はない」

「勘違い……じゃと？」

「自分がいついかなる時、そしていついかなる場所でも強者として通用すると、そんな勘違いをしなくても仕方がないと言っているんだよ」

殺気を瞳に込めたセーラー服の少女が、炎地龍皇に歩み寄った。

そこで炎地龍皇は、右掌を突き出して少女を制止する。

「しばし待て……バルフナートがお主と話をしたいとの事じゃ。奴の自我を強く表に出してみよう」

「ああ、炎龍を出してくれたほうが助かるよ。彼女は状況を正確に理解しているだろうから」

「あい分かった」

赤髪の少女は瞳を閉じる。

そしてカッと見開くと金色の瞳に強い光が灯った。

「シャルリングスと貴方が会話をしている間……ずっと観察させてもらっていた。そして気付いた事がある」

「気付いた事？」

「貴方は迷宮の最深層に潜む者。そして恐らくは私達よりも強い。更に言えば、魂が歪んでいる。」



と、いう事は因果な運命を背負っているって事なんだと思う」

「しかし……」と溜息をついて炎地龍皇は言葉が続けた。

「貴方ですらも最深部の最奥に存在するというアレには通用しない？」

「だからこそボクはここにいるんだよ」

「迷宮内の魔物は既に狩りつくした、という事かい？」

「ご明察だ、正確に言えば美味しく頂けるようなのは、既に狩りつくしたって事だね。攻略グルー
プの幹部連中も含めて、ただ面倒そうなだけの魔物はこちらも相手も互いにスルーしている。結局、
上層域や中層域の雑魚をいくら狩っても文字通り経験値はゼロ、という状況になってしまった」

それを聞いた炎地龍皇は呆れたように笑った。

「経験値を求め、迷宮外にまで……獲物を殺戮に来たと？」

「そういう事になるね」

悪びれもせずにセーラー服の少女は微笑を浮かべる。

「人修羅——ここまでこの呼称が似合う者もないだろう」

「否定はしないよ。共に時の概念という禁忌に割り込んで、そしてボクは狂気へと至る罰を受けて
いる」

「ねえ、貴方は殺し合いの先に何を見る？ 何万、何億の屍の先に何を見る？ 殺しの螺旋は止

まらない？ そもそも何故——邪法に頼った？」

「螺旋……か。確かに言い得て妙だね」

「経験値稼ごのための虐殺と、そして争う事そのものの虚しさ。そこまでして強くなつて最深部に
到達できたとする。何でも願ひ事が叶うって話だけど、褒美に貴方は何を願うというのだろう」

そこでセーラー服の少女は大きく頷いた。

「そんな事は決まっている」

「決まっている？」

「何も願わない。いや、ボクが最深部に到達する事によって、因果の糸——螺旋の全てが終わる
んだ」

何とも言えない表情で炎地龍皇は肩を竦めた。

「貴方は世界の理への干渉スキルを持っている。しかも本当に変わったスキルだ。果たして貴方
とあの少年、どちらの境遇がマシなのだろうか」

「あの少年？」

「少し前に出会ってね。魂が歪み切った少年がいたんだ。何事かと思ったから見てみたんだが……」

【死に戻り】かと思えばどうも違う」

ピクリ、とセーラー服の少女のコメカミが動く。





が、彼女はすぐに首を左右に振った。

「これ以上の回答は無用」

「分かったよ。私もシャルリングスの意識を前面に押し出す。戦闘時の咄嗟とっさの状況判断は彼女のほうが早いから」

すると炎地龍皇の金色の瞳に宿っていた強い光が見る間に失せていく。

入れ替わった炎地龍皇は堰を切ったように笑い始めた。

「一言だけ聞きたいのじゃ」

「……」

「お主が正気を保てる限界も間近じゃろう？ 現時点でわらわと同等程度の力しか持たぬのに……そのペースで何故に深淵まで届くと思っておる？」

「これ以上の回答はするつもりはないから。特にキミみたいなのはね」

左腰に差した日本刀。

その柄つかをセーラー服の少女は握り込んだ。

戦闘の意思表示を受け、炎地龍皇は応じるように右掌を高々と天に掲げた。

「十秒だけ時間をくれ」

「回答はしない」



「違う。恐らく最後の戦いになるというのに、いくらなんでも裸じゃ不味いじゃろう」
炎地龍皇の表皮が白い光に覆われていく。

「そういう事なら待たないでもない。好きにすればいいと思うよ」

数秒の後、「ほう」と感心したようにセーラー服の少女は口を開いた。

「キミ……白一色のワンピースって？」

「ああ、死に装束じゃな」

キッと炎地龍皇はセーラー服の少女を睨み付けた。

「とはいえ、わらわも易々とやられはせぬ。腕の一本程度は道連れにしてやろうぞ……」

「覚悟……決めちゃったか。こうなっちゃうとキミ達の底力は本当に面倒だ。ボクも余裕ぶって
たけど……それなりに苦戦は予想している。逃げるか諦めるかしてくれと、どれほど楽だった
か……」

うんざりといった風に息を吐き出すセーラー服の少女。

対する炎地龍皇は、雄叫びにも似た怒声を発した

「小娘——あまり龍を舐めるなっ！」

第一章 下衆討伐 ▼▼▼▼▼

夜。

深い森の中。少し開けたところに、テントが幾つも張られていた。

パチパチと焼き火から乾いた破裂音が鳴った。

焼き火を中心に、数十人規模の下卑た笑い声が木霊する。

一様に育ちも悪ければ頭も悪そうな風貌の男達が、蒸留酒の酒瓶をラツパ飲みするような無茶な
宴会に興じている。

ゲラゲラと下品な笑い声の中、特に声の大きいのが二人。

スキンヘッドの大男の戦士と筋骨隆々の長髪の剣士は、本日何度目か分からない乾杯で安物のゲ
ラスをカチリとやった。



「いやあ、今回は儲かったな。この儲けは武装盗賊団結成依頼じゃねーか？」
手に持った七面鳥の脚にかぶりつきながら、大男の戦士は笑った。

「大貴族の邸宅に押し入り強盗ですからね。あつしなんてもうブルっちまって……」

「確かにお前、最初のほうはビビってたな。まあ、大勢たいせいが決して警護兵が逃げ出してからは、すこぶる調子が良かったみたいだが？」

「気恥ずかしそうに剣士の男は笑った。

「いやあ……お恥ずかしい限りで」

「しかしまあ、危ない橋を渡ったおかげで金銀財宝の数々と——」

ニヤリと笑って大男は視線を焚き火近くに移した。

そこには年の頃にして十二歳から三十歳ほどの全裸の女が十名程いた。

女達は数十名の男に囲まれ、美醜による差別や年齢による差別などなく、例外なく皆一様に、平等に——なぶ翳られていた。

「メイドが七人に貴族が二名。まあ、大貴族の血族の女なんて滅多に抱けるもんじゃありませんからね」

この男二人は集団の中でも上から数えたほうが早い地位にある。

従って、既に何度も欲望の精を高貴なる血族の者の中に放ったあとだった。

だからこそ安心して、思う存分に飲んで喰らい、訪れる酩酊めいてに身を任せているのだ。

もしこれが順番待ちの状態だったら、コトに及ぶ前にペロペロになってしまっただけは元も子もないと酒量をセーブしながら……となっていただろう。

「しかしお前聞いたか？ 俺らの兄弟達の話」

「一年前に本家の盗賊団から独立したノーチラスのオジキの強盗団の事ですかい？」

「ああ、そうだ。二週間前に半壊の憂うれき目に遭ったあそこの武装盗賊団だよ。残ったメンバーは本家に再吸収されたらしいがな」

しばし考え、長髪の剣士は噴き出した。

「ハハっ！ 半壊の理由が神話の魔物に遭遇したって話でしたよね？ 確かケルベロスでしたっけ？」

「その通りだ」

「しかし、言うに事かいてケルベロスはねーですわ。大方、盗みを働いたあとにドジ踏んでつけられてちまって……アジトを突き止められたんでしようよ。で、AランクかSランク級の冒険者に強襲されて半壊……ってところでしようね」

「俺らの業界じゃあ、アジトを突き止められて貯め込んだ金銀財宝やら構成員の首やらを、根こそぎ賞金稼ぎ連中に持っていかれるってのは最大のヘタ打ちだ。ノーチラス武装盗賊団に属していた



連中としても……格好がつかないってんで、そういう理由にしたんだろうと思っただけだよ」

「アニキ？ どうして過去形なんですか？」

「それが意外に眉唾まゆづばでもねーらしいんだよな」

「っていうと？」

「ああ、そりゃあな……あびゅっ！」

大男が奇声を発した。

「え？」

続けざま、長髪の剣士が素すつ頓狂とんきやうな声を上げた。

「……ナイフ？」

言葉通り、長髪の剣士の視線の先——大男の眉間からナイフの柄が生えていた。

「あびゃ……た……わ……し……イ……」

ドサリと大男がその場に横たわる。

見る間に、地面に赤い染みが広がっていった。

「これは一体どういう……ひゃっ」

続いて、パンつと乾いた音が闇夜に響き渡った。

音速を超えた速度で打ち出された弾丸が男の頭蓋を破り、衝撃波を交えた螺旋回転で脳内を突き

抜ける。

と、同時に、長髪の剣士の頭部に脳漿のうじょうと血の赤いバラが咲いた。

「あだ……らば……あ……？」

長髪の剣士が崩れ落ちる音に続き、次々とナイフの突き刺さる音が響く。

ザシユツ、ザシユツ、ザシユツ。

荒くれども達の頭にナイフの柄が生えていく。

パンツ。パンツ。パンツ。

同時に荒くれどももの頭に赤いバラが咲いていく。

蜂の巣に殺虫スプレーを噴きつけたかの如く——ポトポトと人間が地面に崩れ落ちていく。

——全てが頭部へのクリティカル。

ナイフも拳銃も一つの攻撃につき、確実に一殺。

「残りも十人ちよつとか。あとはお前に任せたぞ。こんな連中を狩っても俺には経験値にならんかな」

横たわる死体からナイフを引き抜き抜きながら、武田順平たけだじゅんぺいはそう言った。

「了解。ダーリン」

「だからそのダーリンっての、止やめろよな……」



呆れ顔の順平に、ウインクしながら坂口亜美は応じる。

「あれ？ 私達恋人じゃないの？」

パンっ。

パンっ。

鼻歌交じりに亜美が引き金を引くと、逃げ惑う男達の内の二人が脳漿を撒き散らして倒れる。

「なし崩し的にそういう事にはなっているが、それとこれとは話は別だ」

そう言って首を振る順平。不意に飛んできた矢を人さし指と中指で摘むと、そのまま矢じりの方向を百八十度回転させ、手首のスナップを利かせて飛んできた方向に投げ返す。すると死体がまた一つ増えた。

「あとは私に任せたって言ったじゃん……」

「すまん。攻撃されちまうと反射的に殺っちまう……」

ハアと亜美は溜息をついて順平に近付いてきた。

そして順平の体を服の上から弄る。主に順平の胸部——乳首の辺りだ。

「おいお前……こんなところで何やってんだよ？」

すると亜美は意地悪く笑った。

「むしろこんなところで何をやっているかと想像してるのよ。本当に頭の中……そればかりなのね。

「まあそれだけ私の体が魅力的という事だから悪い気はしないんだけど……」

「ん？ どういう事だ？」

「順平？ ちょっとコレ借りるよ？ ちょっとだけ手こずりそうだから」

順平の上半身の定位置——鞆から亜美は魔獣の犬歯を抜き出した。

「一振りしかねーんだからなくすなよ？」

「そんなヘマはしないわよ。多分アレが頭目だと思う」

「だろーな。一人だけ動きが違う」

そうして亜美は一直線に駆け出していった。

狙う先は一人生き残った小男。

亜美の放った銃弾を数発、視認して躲した男だ。

「よいっしょとおおおおお！」

間合いに入ると同時に亜美は跳躍。

小男の上を取り、魔獣の犬歯を振りかぶる。

男はニヤリと笑い、懐からナイフを取り出した。

「見たところ、お前はスピードタイプ……っ！ 細かく動いてナンボのステータスじゃねえのか？ 空中ではちょこまか動けねーぞ？ 自らのアドバンテージを捨てるとはとんだドアホウだなっ！」



亜美の繰り出した犬歯を男は避ける。

そして、落下軌道に入った亜美に合わせ、男はナイフを宙に向けて投擲した。

「ところがどっこい——空中でもちょこまか動けるんだよねっ！」

次の瞬間、亜美は空を蹴り——落下軌道を男から遠ざかる方向に変えた。

「なっ!?!」

男の繰り出したナイフが空を切る。

再度、亜美は空を蹴って、今度は男に向かって急速に切り返した。

「スキル【空中制動】……曲芸みたいでしょ？」

ザシュっ。

首筋の頸動脈が掻き切られ、男は噴水のように血液を撒き散らしながら、その場に崩れ落ちた。

ピクピクと男は痙攣する。

が、亜美は不用意に近寄らずに、しばらく男の様子を確認する。

「ある程度の強者相手に致命傷を与えたら、まずは状況の確認」

痙攣する男の頭部に銃を構え、そして引き金を引いた。

「そして遠距離から追撃を仕掛けて確実に無力化する」

パンっ。

脳漿の混じった液体が周囲に散乱した。

「追撃は複数回。確実に死んだと思ってから更に二回」

パンっ。

パンっ。

頭部に一撃、心臓に一撃。

男が完全に沈黙した事を亜美は確認する。

そうしてパンパンと掌を叩きながら順平に向けて歩みを進めた。

「しかし、本当に雑魚を倒してもレベルって上がらないのね。ここ一か月で賞金首を壊滅させまくったのにレベルが7しか上がっていない。さっきの小男みたいなAランク級の賞金首も混じっていたのによ？」

「俺に至ってはレベル1も上がっちゃいねえぞ。レベルだけならお前はSランク冒険者並みだから……当たり前と言えば当たり前だ」

順平と共に闘って原田良一を倒した事により亜美のレベルは200近く上がり、レベルだけで言えばSランク級相当ととんでもない事になった。

順平が一番最初に不死者の王を討伐した時、そのレベルは178まで上昇した。

原田も迷宮の深層攻略組で、そしてノーフライフキングも迷宮の魔物だ。



ただの一度の討伐で、人類最高位であるSランク相当までレベルが上がってしまったのだから、彼の地の迷宮がどれほどぶっ壊れた難易度であるかが分かるだろう。

「って事で今回のギルドからの依頼も大詰めだな」

「うん。そだね」

順平と亜美は、先ほどまで輪姦りんかんされていた全裸の女性達に向かって歩いていく。

大貴族の邸宅から攫さらわれてきた連中で、基本的に見た目のレベルが高い。

その中でも一際美しい、二十代の銀髪の女性に順平は声をかけた。

「とりあえずこれを着ときな」

マントを放り投げた順平に、銀髪の女はペコリと頭を下げる。

「ありがとうございます。お二人はギルドから強盗団の討伐で派遣されてきたのです？」

「ああ、そういう事だな」

「多少乱暴はされたあとですが……助かりました。これほどの迅速の救助……今回の襲撃でお亡くなりになられたお父様……マシリス公爵の名前に感謝をしなくては」

女は涙を浮かべ、順平に頭を下げる。

ところが順平は首を左右に振った。

「で、俺らの今回の討伐依頼の本命はあんたなんだよ」

「え？」

「なにせ依頼主は……あんたの父親であるところのマシリス公爵、だからな」

「……依頼？ お父様は強盗の襲撃で亡くなられた……」

怪訝な表情を浮かべる銀髪の女に、順平は肩を竦めて応じた。

「ああ、ガツツリ生きてるよ？ 襲撃の際に死んだのは影武者だ」

「……………え？」

大きく目を見開く女に順平は更に言葉が続ける。

「使用人の若い男との駆け落ちの失敗。男は殺されて、あんたは家に連れ戻された。で、そっから、ヤ棄けになったんだって？ まあ……ちょっと火遊びが過ぎたな。マンドラゴラをはじめとしたドラッグ乱交パーティーを主催して日夜のランチ騒ぎ……」

「……………」

「全ては父への復讐……マシリス公爵家の名前を汚すためにやってた事なんだろう？」

女は真っ直ぐ自分を見つめる順平に、耐え切れない……といった様子で視線をそらした。

「……結局、こういう事なんでしょうか？」

「最愛の男を殺されたあんたは、どうしても父親が許せなかった。家名を汚すような馬鹿な行動を取っても……それでもあんたの鬱憤うづげんは晴れなかった」



「……」

「あんたは悪手を取った。父親を殺すために……屋敷の警備を中からかき乱し、強盗団の押し入りの手引きをした」

「……い、い、言いがかりです！ 私はこの連中に翻られて……」

「そう、あんたも強盗に捕まった。だが、本当はその後に解放される取り決めだった。違うかい？ まさか被害者が真犯人だとは誰も思わねーからな。そうしてあんたは遺産だけを相続して、あとは悠々自適って奴だな。だが、あんたの行動が全てバレてたって考えてみる……いろいろと今回の件でおかしいところがあつたとは思わないか？」

そこで女ははっと息を呑んだ。

「確かにあの日、やけに警備が手薄で……それに……それに……ギルドに緊急配備をかけたとしても一日も経過していない……今この段階でもう救援が来るとは考えにくい」

「ご明察だ。強盗が押し入る前から、俺と亜美は一部始終を見させてもらっていた。首謀者も含めて全員を一網打尽にするためにね」

消え入りそうな声を発するとともに、女はまつ毛を伏せた。

「……でも……証拠が」

「証拠？ 俺には索敵関係のスキルがある。強盗が押し入る直前に屋敷の裏口をあんたが開いた事

を知っているし……それだけで十分だ」

「……結局……どういう……事でしょうか？」

「父親に嵌められたんだよ、あんたは」

「ハメられ……た？」

「あんたは公爵家の悪名を吐き散らすだけの害悪だ。しかも公爵からすればいつ娘に寝首をかかれるか分からないと……そんな状況が長らく続けば実の子供でも殺してやりたいと思うだろうよ。大貴族様にとっては女の実子なんざ政略結婚の駒以上の価値はねーし、妾めかけに産ませた子供まで数えるとダース単位の世界だろ？」

「……」

「かといって高貴なる家名を背負っている手前、表だって殺す訳にはいかない。そして仕組まれたのが今回の舞台装置って奴だな。で——死刑執行人は俺だ」

そこで諦めたように銀髪の女は首を左右に振った。

「分かりました。しかし一つお尋ねしたい」

「何だ？」

「それほどの力があるのに、ギルドの……父の飼いだよろしいのですか？ 命令で、あなたは人を殺すのですか？」



ハハッと順平は笑った。

「胸糞悪そうだったからこの依頼は断ろうと思ったんだよ。ただ、資料を見て気が変わった」
「……………」

「あんたのドラッグパーティーは黒魔術のミサの形式で行われているな？ その時の定番として……攫った浮浪児を火にくべて悪魔崇拜の儀式を行っていたはずだ」
「……………」

「俺にとっては、それだけで人を殺す理由としては十分なんだよ」

深い、深い溜息を銀髪の女は吐き出した。

そのタイミングで順平は亜美から拳銃を受け取った。

「ヨアヒム……もうすぐあなたに再び会う事が……優しく気高いあなたに……ようやく」

「残念だが……」という前置きで順平は首を左右に振った。

「優しく気高かったっていうその彼氏に……お前は会えないだろうよ」

「……………」

照準を女の眉間にセットし、順平は言った。

「お前のその言葉が正しいとするならば彼氏は天国だ。そしてお前は地獄に落ちるだろうからな」
「……………」

そうして順平は銀髪の女に、左手でファックサインを決めた。

「地獄から——天国の彼氏に向かって懺悔しな」

——パッと乾いた音。

続いて人間が一人……崩れ落ちた音が周囲に響き渡った。

南北に伸びる昼下がりの街道。

大陸を東西につなぎ、始点から終点まで一万二千キロメートルあるとされる巨大交易路だ。

東の果てから香辛料を荷馬車一杯に詰め込んで西の果てで売りさばくと、贅沢さえしなければ一生暮らせる程度の利鞘りざおが生まれるという。

とはいえ、個人が荷馬車でそれをやろうとした場合、途中で野盗やら魔物やらの餌食えじきになるだけだしなかなか難しい。

「しかし……」

街道を歩く順平は軽食を頬張りながらそうぼやいた。

ちなみに食べているのは白パンに、炒めたオークキングのハムを挟んだもの。

味付けは塩と酢、そしてオリーブオイルのドレッシング風の調味料。そこに大量の香辛料を塗布



したもので、少し変わった味付けのサンドイッチである。

「ん？ さっきから難しい顔してるけど、どうしたの？」

順平とまったく同じモノを頬張る亜美がそう尋ねる。

「連中の会話を聞いてたか？」

「あー、そういえばケルベロスがどうのこうのって言ってたわね？」

しばし順平は押し黙る。

地球では神話の中でのみ存在する魔獣である。

異世界でも、やはりそれは伝承上にしか存在しない超レアモンスター。

しかし、あの迷宮では当たり前に出てきた。

腕を喰われた順平からすると、そういった噂を聞いただけでも内心穏やかではなくなる。

いや、というよりも彼^かの地の迷宮については思い出したくもないというのが本音だった。

「……」

押し黙る順平に亜美は怪訝そうに尋ねた。

「本当にどうしたの、順平？」

「ん？ ああ……ちよつと考え事をな」

遙か遠方を眺めながら順平は呟いた。

「ケルベロス……か。まさかこっち側にもいるとは思えねーが……。しかしあの時は俺がゴミステータスだったからどうしようもなかったが……今ならどうなんだろうな？」

「ん？ あの時？ こっち側……？」

「ああ、気にするな。独り言だ」

「だから私は……どうしたのって聞いているんだけど？」

「ああ、別に何でもねーよ」

「そんな事ないよね？ それにあっち側とかこっち側とかあの時とか……教えてくれないの？」

「言っても仕方ねーからな？」

そこで亜美はムスッと両頬を膨らませた。

「……私は少し不愉快になりました」

「ああ、そりゃあすまなかつたな」

「……本当に教えてくれないの？ どうして私に隠し事はかりするの？」

「何度も言ってるが、言っても仕方がないからだ。俺を取り巻く環境は少し特殊にすぎる」

亜美は再度ブスッと両頬を膨らませる。

「頑^{かた}なに教えないって言うんだったら無理には聞かないよ。順平がそこまで言うんだもん、私が聞いたところで本当に仕方がないだろうし、むしろ順平の不利益にしかならないでしょう？」



「そういう事だな」

「でも、私は不愉快になりました。その責任は取ってもらいます」

そして何かを思いついたように意地悪く笑うと、順平に向けて唇をすぼめた。

「んっ」

「何だ？」

唇をすぼめるのまま、再度言う。

「んっ」

「だからなんなんだって」

「……分かるでしょ？」

呆れ笑いを浮かべながら、順平は亜美にキスをした。

しばし舌を絡め合い、数十秒後に糸を引きながら唇と唇が離れた。

「これで満足か？」

ニツコリと笑いながら亜美は応じる。

「うむ。余は満足じゃ」

「なんで殿様っぽいんだよ」

「まあ、それはいいとして、次の街に早く急ごう。日が暮れちゃうよ」

「旅をしながら、ここ一か月でこなしたギルドの依頼総数は七つか。この前の公爵家の案件が凄く効いたみたいだ。これであと一つか二つ依頼をこなせば……俺らは晴れてAランク級の冒険者になれる」

うん、と頷き亜美は言った。

「早く次の都市のギルドで報奨金を貰おうよ。それでそのあとは……」

ああ、と頷き順平が続ける。

「祝杯と行こう」

そこで亜美は大きく目を見開いた。

「ソッコー宿屋にしけこんで……イチャイチャするんじゃないの？」

「何を言っているんだお前は」

「ベッドをするの久しぶりじゃん？ 毎日やってはいるけど……野営のテントじゃお尻と背中が痛くて集中できない……」

ゴンッと亜美の頭にゲンコツが落とされる。

「お前はもう少しデリカシーというものを持てよ」

「で、どうするの？」

「何をだよ？」



「街についたらすぐに宿屋に駆け込むの？ 駆け込まないの？」

「別に飯食ってからでいいじゃねーか」

「結構、私は溜まってるから……サービスするよ？ 順平は溜まってないの？」

確かに最近は何故かマグロ気味だったな……野営が原因だったのかと、順平は得心したように軽く頷いた。

そうして、しばし何かを考えたあと、視線を下方に落としながらこう言った。

「……駆け込みます」

満足をそうに亜美は頷いた。

「正直でよろしい」

しかし……と順平は溜息をついた。

「次の街で街道の西の終着地点だ。そこから山道に入って二日だったか？」

「うん。私と妹がこの世界に来てから身を寄せていたダーマス村ね」

「坂口なずな……だったか？」

「うん。四歳離れているから今は十二歳。私に似て美人だよ？」

「ああ、お前に似てたら確かに美人かもしれねーな……って、やかましいわっ！」

順平は亜美の頭をパシンとはいた。

そこで亜美は一瞬驚いた顔をし、しばらく固まってから吹き出した。

「プっ……ハハっ……」

「ん？ 今のでウケたのか？ お前の笑いのレベルって低いんだな」

亜美は首を左右に振った。

「違うよ。何て言ったらいいのかな……」

「ん？」

「順平でも……そういう事するんだねって」

「そういう事？ 何をだ？」

「ノリツッコミだよ」

「……？」

「んー。通じてないかぁ……何ていうかね、初めて会った時と今の順平はちょっと違う気がするんだ」

「違うって？」

「何ていうか……自然に笑顔が出るようになったからさ。前はもっと張りつめてたっていうか……」

しばし順平は押し黙り、そして肩を竦めた。

「まあ、そういうもんなんじゃねーのか？」



第二章 ダンジョンシーカー

ハッハー！

俺の名はヘルメスⅡマッキンリー！ 凄腕のトレジャーハンターだ！

ちなみに日本での名前は郷田洋平ごうだ ようへいだったが、異世界のみんなには内緒だぞっ！

と、まあ、そんな内緒事項は別として俺はぶっちゃけ、かなり凄い。

何が凄いかっていうと、ヘルメスⅡマッキンリーという名前で普通に通るぐらいに顔が濃い。

そしてオッサン顔だ。

日本にいる時からオッサン顔っていうので、人から馬鹿にされていたっけ。

小学四年生で駅員に『子供料金って……いい大人が恥ずかしくないんですか？』とか言われたのには本当に笑ったね。

タップもあつたしな。小四で百六十八センチってかなりのもんだと自分でも思う。

そんなもって、二十八歳の今になっても身長は百六十八センチで変わらずだ。

どこにいったんだよ、俺の第二次成長期はよ。

ちなみに見た目は三十五歳で小学校の頃から変わらない。

って、話が脱線しちゃったな。

何が凄かってそんなしょうもない事じゃねえ。普通に俺は異世界では強者の部類に入る。

なんせ、Sランク級冒険者に数えられていて、レベルも今現在270だ！

どんな迷宮でも俺の実力とトレジャーハントのスキルさえあれば一発KOだ！

世界中の迷宮や遺跡を巡ったおかげで、数々のレア装備も完備して向かうところ敵なしってきたもんだ！

そんな感じで少なくとも迷宮攻略においては俺の右に出る者はいなかった。

本当に楽勝だったんだよ。

——ただし、一般的な意味での最高難度の迷宮ならな。

さっきも言ったが、俺はソロプレイで超高難度ダンジョンを次々踏破してきた。



立ち読みサンプル はここまで

で、表のダンジョンで最高峰とされる迷宮をクリアしたあとの事だ。
俺は酒場で最悪の迷宮の噂を耳にした。

聞けば、未だに世に広く知られていない高難度の迷宮があるって話だったんだ。

それはつまり最強のトレジャーハンターである俺にとって、最悪の迷宮とくればイコール最高に割のいい仕事となる訳だ。

しかも前人未踏で世に知られていないというのも非常に魅力的だった。

何と言っても誰にも荒らされていない訳だから、迷宮に眠る財宝も選り取り見取りつて奴だからな。

——で、現在……俺はその『狭間の迷宮』の二十三階層にいる。

一人でもともに攻略できたのは、最初のほうの低層で隙と弱点を突いて何とか二、三階層のみ。

あとは全て逃げの一手だった。

それでもって俺は今——自らの腹から、臓物を撒き散らかして絶賛虫の息って奴だ。

おあつらえ向きに、血に飢えた十を超えるケルベロス達が俺の周囲を徘徊している。

ハハっ、本当に笑えねえ。

なんせ、ケルベロスだけケルベロス！

神話の生物が、この階層ではまるで雑魚キャラですって顔をして、それがダース単位でそこかしこにいるんだから本当に笑えねえ。

いや、ありえねえ。俺にとっては雑魚じゃねえ。

しかも、この階層には安全地帯が存在しないときたもんだ。

恐らくここまで到達した連中が、この階層で手こずるはずがないという想定なんだろう。

だからこそ安全地帯がない。息抜きの意味合いの階層なんだと思う。

とにかく大量のケルベロスがそこかしこにいる状態で、雑魚敵の殲滅戦みたいな様相を呈している。

繰り返すが、俺にとっては雑魚じゃねえつつうの。

実際に【過去視】の能力を使っても、この階層を攻略した連中は圧倒的なレベル差を活かしたゴリ押しか、あるいは冗談みたいなスキルを活かしてのこれまたゴリ押しだった。

まあ、共通する事はみんながみんな余裕のよっちゃんでこの階層を突き進んでいったって事だな。何度だって言うが、俺にとってケルベロスの大軍の単純配置ってのは致命傷だ。

なんせ、俺は【過去視】の能力で上手く隙をついて、逃げの一手だけで二十三階層まで潜ってこられたんだからな。

単純なパワープレイの物量作戦は相性が悪すぎる。

